

「落語と私」 その参拾六

三代目 橘ノ百圓

新型コロナは実に困ったものです。東京では一時1,300人を超える日が在りまして、一人一人の努力だけでは限界が在る様に思います。早くワクチンが実行されると良いですネ。

前は、吝な味噌屋の旦那が無事出産をしたオカミさんの里のお祝いに招かれて「今夜は泊りに成ると思うから、戸締りと火の用心を(中略)もしご近所で火事の際は、大事なのは味噌蔵だから・・・と言ひ残して小僧の定吉をお供に連れて出掛ける処まで書きました。

サア“鬼の居ぬ間に心の洗濯”とばかりに一番歳嵩の甚助が奉公人の総意を伝える為に番頭さんの前へ「番頭さん、旦那は今晚、お戻りが無いと言う事でございますが、私ご当家に奉公に上りまして13年に成りますが、ご飯の際にオカズが付いた試しがございません。一応商売が味噌屋ですので、御御御付(味噌汁)は出るのでありますが、やはり中身が入っておりません。こないだ、中に田螺が二ツ入っていたのですが、これが味噌が薄かったんですネ。自分の目玉がここに映ってまして、情けない話です(中略)そこで、旦那の留守に我々店の者に番頭さんがご馳走をして頂きまして、お勘定の段に成りましたら、そこは番頭さんの才覚で帳面の方をドガチャカドガチャカと言う様をお願いしたいと思ひまして」この話しには番頭さんも始めからその積りで、店の者全員の希望する食べ物を読み、それを届けてもらう事と決まり、中に町内の豆腐屋さんで売り出している“木の芽田楽(味噌田楽)を食べてみたいと言う者が在り、番頭さんが「木の芽田楽か、そりゃ良いナ。私も一ツご相伴に与かろうかな。エッ、お前達もか、アアそうか、じゃアこりゃ人数分だナ(中略)断っておきますがネ、蛸の酢の物、そう言う物は大皿に一ツ盛で構いませんが、田楽、あれは熱いうちが身上ですから、ご面倒でも二、三丁ずつ焼け次第お届けを願う様にと云ってナ」サアこれから店の者達は、日頃の鬱憤を晴らす様に、飲めや歌えの大騒ぎ「エエ？大丈夫ですヨ、旦那は帰っちゃ来ませんヨ、もし帰って来ましたら、そこに有る鯛の塩焼を旦那の目の前にバァーンと差し出せば、何しろ魚は目刺しか知らないんですから、日本にこんな大きな魚が有ったのか!?と思ったとたんに目を回しますから、そのまんま寝かせちゃいましょう。旦那が目を覚ましたら『夢でもご覧に成ったんでございましょう』夢です夢ですテンで誤魔化しましょう。今夜は、皆んなで夜ッピてワァーと陽気に騒ぎましょう」「サアサア確っかり歩きな確っかり」これは旦那が定吉に対する小言。正に起承転結の“転”の部分で、大きな舞台転換と成ります。「お前くらいドジな奴は在りませんナ、空で持って行った重箱に、先方のお料理を詰めましたって、忘れて来たら何ンにも成らないじゃないか、バカだな、お前は、折角裸足で行ったのに、出がけに慌てやがって、草履と長靴と片ッポずつ履いて来やが



ら、何イ？家内の里には泊りません。風が強い、火事が心配なんですヨ火事が、ほら何処の家だか灯が点いて居る所が有りますヨ、何、お豆腐屋さんかい、こうやって、ご近所で遅くまで火を使って居る所が有る、それが私は心配なんですヨ。また何処の家だか知らないが、大きな声で騒いでる所が有りますヨ（中略）こう言う所はネ、主の躰が悪いからそう言う家が出来上がるんだ。また、ギャーだなんて大きな声で、甚助に良く似た声だ、ウン甚助の声だ！この節穴で覗いて、何んだコリヤ、こ



んなにお料理を沢山並べやがって」「ハッハハ、有難いですネ。これだけのお料理を頂いて、割前は要らない、後は番頭さんが帳面をドガチャカドガチャカ」「何イ、これが皆んなドガチャカ、そんな馬鹿な事が在るもんか」ドンドン（旦那が扉をたたく）「商人の家は十時限りでございます。お買物でございましたら、また明朝お願い致します」「私だ私だ、ここを開ける！」「サァ大変だ目刺が帰って来た、皆んな慌てちゃいけない、小さな物は枕に入れて、甚助、蛸の酢の物そんな大きな皿が枕に入る訳ないじゃないか、お前その上に座んなさい」「イヤ私、あまりこう言う所に座った事が無い」「誰だって無いんだ、急いで居るんだ早くしなさい」「では、番頭さんのお言い付けでございますから、エッアッ、番頭さん酢が禪に染みて参りました。これ何ンですか？後で食べる時には一辺キュと禪を搾って」「誰も食べない、良いネ、お開けして。お帰りなさいまし」全員酔って「お帰いなさいまし」「後を閉めなさい、不用心だからお閉めッてんです。番頭さん只今帰りました。ちょっとこっちへ来て貰いましょうか。私しゃネ出掛けに戸締りと火の用心は頼みましたが、こんな結構な事をしてくれと頼んだ覚えは在りません（中略）こんな事をして、後の勘定はドガチャカ、そんな馬鹿な真似はさせません、月々のお前達の給金から引かして貰います（中略）赤い顔して起きてたって役に立ちゃあしないんだ、皆んな寝ろ寝ろ寝ちまえ!!」旦那はカンカンに成って怒ってしまいますが、間の悪い時は仕方の無いもので、頼んでおいた田楽が届いて来ましてトントントントン「今晚は」トントントン「今晚は」何ンにも知らない旦那「ヘイ、商人の家は十時限りでございます。お買物でございましたら、また明朝お願いを致します」トントントン「焼けて来ました」トントントン「焼けて来ました」「エッ焼けて来た、またこう言う時に限って災難が！エエ何処から!？」トントントン「横町の豆腐屋から」「火元は近いヨ、どんな塩梅で？」「今んとこ二、三丁（町）焼けて参りました」「火足は早いヨ」「後からドンドン焼けて来ます」サァ大変だ、旦那も慌ててますから急いで扉を開けるトタンに田楽の味噌の香りが鼻にツーン。「アアしまった！味噌蔵に火が入った」

見事なトタン落です。旦那の顔が目に浮かびます。

約3年に渡り書いて参りました「落語と私」ここで一旦筆を置きます。長年ご愛読頂きました皆様に、心より深く感謝申し上げます。また何か新しい話題でも在りましたら、月報でお目に掛かると思います。有難うございました。

皆様くれぐれも、お体を大切に。

